世紀代の須恵器というと，すぐに搬入品で処理されていたので，このことに関しては，再検討が必要であろうから，あくまでも可能性にとどめておく。

だが，もしも埴輪の窯の出現の方が先であったとしても，それには須恵器窯や，須恵器工人の関与，もしくは影響というものを抜きにする事の不可能なことは言うまでもない。

4．おわりに

以上であるが，本稿では紙数の制限があるため，埴輪そのものや窯構造と製品の相関関係，工人活動，及びその需給状況については全く触れる事が出来なかった点をお詫びする。

（8班・東金事務所）

註

1）関東地方以外では山口県萩市大井埴輪窯跡が地下式無階有段，長野県鬼戸2号窯が半地下式無階有段の窖窯である。

2）名古屋東山10号，11号窯等に報告例が見られる。

参考文献

大塚初重・小林三郎「茨城県馬渡における埴輪製作址」明治大学　昭51

『公津原』千葉県企業庁他　昭50

塩野博他「馬室埴輪窯跡群」埼玉県教育委員会　昭53

「生出塚遺跡」鴻巣市遺跡調査会　昭56

「割山遺跡」深谷市割山遺跡調査会　昭56

「桜山窯跡群」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　昭57

小沢国平「江南権現山埴輪窯址」『台地研究№14』台地研究会　昭39

大川清『栃木県佐野市安蘇山麓古代窯業遺跡』昭39

津金沢吉茂他「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」『群馬県立歴史博物館紀要』第1号　昭55

安藤鴻基「千葉県木更津市埴輪窯址の調査速報」『古代』57号

坂詰秀一「埴輪窯跡序論」『立正史学』28号　昭39

「富沢窯跡」古窯跡研究会　昭49

小田富士男他『立山山窯跡群』八女市教育委員会　昭47

「金屋遺跡群」埼玉県児玉郡児玉町教育委員会　昭56

「長沖古墳群」埼玉県児玉郡児玉町教育委員会　昭50

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号　昭53

中村浩『窯業遺跡入門』ニュー・サイエンス社　昭57

中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　昭56

石部正志「技術の発生と伝播・定着」『技術の社会史1』有斐閣　昭57

千葉東南部地区における方墳の様相

栗　田　則　久

I

千葉市東南部地区においては，昭和49年度に椎名崎古墳群（第1次）が調査されたのを契機として多くの古墳群が発掘され，その内容が明らかになってきた。それに伴い，古墳時代後期における古墳群が東南部地区においてどのように展開していったのかが徐々に解明されるような状況を呈してきている。本地区における古墳群のあり方の解明はひいては上総・下総の接壌地帯における後期・終末期古墳群の把握につながるものであり，非常に興味深い資料となり得るものであろう。ただしこのためには各古墳の様相，古墳群としてのとらえ方に十分な検討を加える必要があるため，現時点では全体に波及することは控えておく。そこで本稿では，古墳群中において，立地等特徴的な傾向を示す方墳について若干の私見を述べていきたいと思う。

II

東南部地区において方墳を含む古墳群は，現在までのところ，ムコアラク遺跡(註1)，六通金山遺跡(註2)，大膳野北遺跡(註3)，大膳野北貝塚（註4），木戸作貝塚（2次）（註5）の計5遺跡で認められる。これらの古墳群が東南部地区において，

図1　千葉東南部地区における古墳群分布図（N－54－19－15－2）
（1.ムコアラク遺跡　2.六通金山遺跡　3.大膳野北遺跡
4.大膳野北貝塚　5.木戸作遺跡　斜線部分が方墳群）

どのような特性をもって形成されていったのかを検討する前提として，まず各古墳群の概要を呈示しておく（図1）。

ムコアラク遺跡

本遺跡は樹枝状に侵入する小支谷の奥部台地上に位置し，標高は44～45mを測る。鬼高～国分期の集落とともに古墳9基，方形周溝遺構6基が検出された。古墳は，前方後円墳1基，方墳8基で，埋葬施設は横穴式石室・箱式石棺・木棺直葬が認められる。なお，6基の方形周溝遺構のうち2基は立地する位置および規模等より方墳となる可能性が強く，これらを加えると本遺跡における方墳は10基ということになる。遺跡内における方墳の占地状況からみると，2～5号墳は前方後円墳を中心に集中し，6～8号墳は小支谷を狭んだ台地上に一直線に並んだ状況を呈することから，これらがそれぞれ別の支群として把えられるかもしれない。

六通金山遺跡

本遺跡は，ムコアラク遺跡より300m程東側で，谷を1つ狭んで対峙する。やはり樹枝状に開折された台地奥部に位置し，標高46～47mを測る。本遺跡より検出された古墳は5基で，2基が円墳，3基が方墳である。埋葬施設は，土壙が1基みられる以外はすべて横穴式石室の形態を呈するもので，なかには同一墳内に2基の横穴式石室を有するものも認められる。立地的にみて，1・2号墳と3～5号墳の2群に分けて形成された可能性が強く，それぞれの群内に1基の円墳を有す。

大膳野北遺跡

本遺跡は，東南部地区の東端で，樹枝状に開析された台地の最奥部に位置する。標高は49m程を測る。本遺跡より検出された古墳は方墳1基のみで，埋葬施設は横穴式石室となる。他に方形周溝遺構が1基存在する。大膳野北貝塚は本遺跡と同一台地上に位置しており，方墳が2基検出された。埋葬施設はやはり横穴式石室である。

木戸作遺跡

本遺跡は，樹枝状に開析された台地上に存するものの，上記の遺跡よりはかなり谷口に近い点，やや立地を異とする。縄文時代の遺構を主としており，ここより検出された方墳は1基のみで埋葬施設を有さない。

以上，東南部地区において検出された方墳は計15基で，各遺跡における方墳のあり方にはそれぞれ共通するものが認められそうである。そこで次には当地区における方墳の性格を明らかにするために，立地・墳丘等要素別に呈示して遺跡間の共通性を導き出してみたい。

III

方墳の性格を決定する資料として，占地・規模・埋葬施設・副葬品をあげてそれぞれについて若干の検討を加えることにする。

占地

各遺跡の概要で述べたように，木戸作遺跡を除いた4遺跡は樹枝状に開析された台地のかなり奥部に位置することが認められた。これによって，方墳を主とする古墳群が円墳および前方後円墳によって構成される古墳群よりさらに奥地に展開することが1つの特性として把えられそうである。

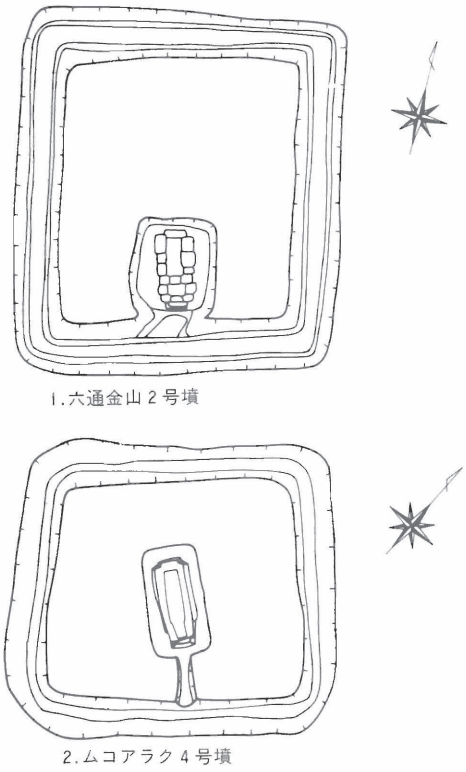
規模

六通金山遺跡3号墳の16×20m，大膳野北遺跡における18×18mを最大，ムコアラク遺跡9号墳の8.5×8.0mを最小とする範囲内にすべての方墳が含まれる。六通金山遺跡における円墳が径25m前後を測るものであるのにくらべてもかなり小規模となることが，方墳群の規模の規制として考えられる。

墳丘に関してはどうであろうか。ムコアラク遺跡6号墳において旧表土より1mの高さに積まれたものが最高で，なかには墳丘の無いものが9基含まれる。15基中9基に墳丘が認められないことは，墳丘の削平という状況を考慮しても異常である。かつて杉山晋作氏が「……房総の中でも先進受容地域と考えられる東京湾東岸においては，盛土が存在しなかったのではないかとさえ思われる。」と記していることは，これらのことを如実に示しているものではなかろうか(註6)。これが何を意味するかは，古墳群中で多くみられる方形周溝遺構と関連する問題であり，このことについては別の機会で考えてみたい。

埋葬施設

当地区における15基の方墳からは，16基の埋葬施設が検出された。これらを形態別にみると，横穴式石室が最も多く15基，箱式石棺が1基のみとなる。さらに，ムコアラク遺跡8号墳で横穴式石室と箱式石棺，六通金山遺跡5号墳で横穴式石室2基の組み合わせが複数の埋葬施設を有す例となる以外はすべて1基の横穴式石室を埋葬施設としている。構築位置は，南辺のほぼ中央部から堀り方をもち，奥壁が墳丘の中央に達しないのがほとんどである(図2－1)。ただ，ムコアラク3・4号墳のように墓道が極めて長いために，玄室部が墳丘中央部に位置するものも認められる（図2－2)。横穴式石室の構造に関しても，両袖式となる



1.六通金山2号墳

2.ムコアラク4号墳

図2　東南部地区方墳形態図（1/400）

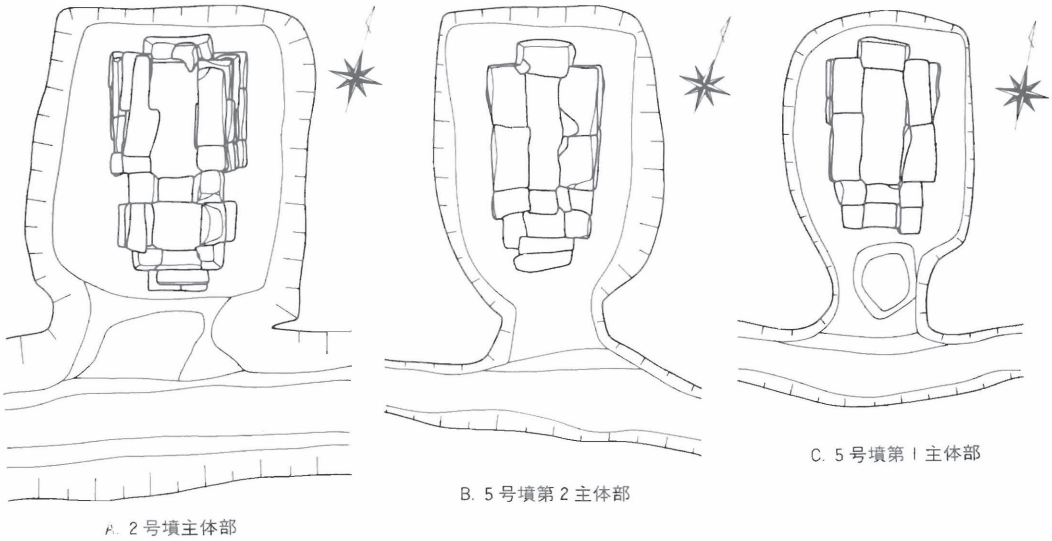


図3　六通金山遺跡における横穴式石室の変遷（1/120）

ものの，羨道部が簡略化され単室構造を呈す状況が共通の要素としてあげられる。ただ，簡略化されたなかでもある程度の変遷はみられる。図3は六通金山遺跡で検出された石室のうち形態の時期的移行を示すものであり，A→Cへと時期が降る様相を呈している。羨道部がその特徴を顕著に示しており，Aの段階で比較的明確なものが，Cの段階では羨道部が消滅し，箱式石棺的なものとなってしまう。

当地区における円墳を主とする古墳群においては，埋葬施設の多様化と同一墳丘内の複数の埋葬施設の存在が多く認められる状況のなかで，方墳を主とする古墳群においては，その埋葬施設の画一化が侵透しているようである。このような状況は，方墳を主とする古墳群の1つの特性として指摘することが可能である。

副葬品

明らかに埋葬施設に伴う副葬品が出土した方墳は，15基中6基を数えるのみである。その副葬品の組み合せは，直刀・刀子・鉄鏃・玉類を基本的なセットとしている。これらは後期古墳群における通有の遺物相であって，特に方墳においての特性というものはみられない。ただ，すべての埋葬施設内に，材質および形状が異なるにせよ玉類が副葬されていることは記憶に留めておいてよい状況であろう。

以上，当地区における方墳に付随する諸要素から，それらの共通性および特性を導き出してみた。このことによりある一定の方向性をうかがうことができるが，もう1つ重要な問題としてそれらの構築年代を把握しなければならない。先にみた埋葬施設よりの副葬品のセットは後期古墳に通有のものとして考えられることは明白である。しかしながら単に後期古墳という範疇ではなく，さらに細かい年代付けが必要であることは，方墳を後期古墳の1つの現象として把える際に当然生じてくる問題であろう。それには，比較的編年の確立されている須恵器をみることが有効なのは言うまでもあるまい。ただ資料的に乏しく，本地区においては，ムコアラク遺跡と六通金山遺跡において出土したのみである。

ムコアラク遺跡より出土した須恵器は長頸壺・短頸壺・平瓶を主とするが，数的に少なく明確な年代は把え難い。ただ，長頸壺は底部に低い高台がつき，胴部は丸味を有するものの弱い肩が形成されることから7世紀後葉の所産と考えられよう。また，平瓶も口頸部が直線状を呈し，肩部に比較的明瞭な稜をもち，底部が平底状となる点はやはり同様な時期に含まれるようである。六通金山遺跡の方墳に伴う須恵器はさらに少なく，長頸壺・短頸壺がみられる程度である。これもムコアラク遺跡同様7世紀後葉の範疇で把えられるが，5号墳出土の長頸壺は若干下降する可能性が強い。

以上のことから本地区における方墳の時期を決

定することには多少危険が含まれるかもしれないが，先に述べた方墳の立地・埋葬施設等に一定の特性・共通性が認められる点からすれば，それらの同時性がうかがわれ，数的に乏しい須恵器の年代に方墳群の構築時期を求めることが妥当と思われる。もちろん，鉄鏃等の副葬品の形式あるいは円墳等の他の古墳出土の須恵器を詳細に検討すれば，さらに詳しい年代が想定されようが，ここでは，一応7世紀後葉を中心とする時期に本地区における方墳群が形成されたと考える。

Ⅳ

以上のような方墳群の遍在性およびその特性は，単に当地区における後期古墳群のなかで重要な意味をもつだけでなく，他地域との関連のなかでさらに明確な傾向を把握することが可能となってくるのではなかろうか。そこでここでは，他地域の方墳群との比較によって当地区の様相を呈示してみたい。

まず，当地区と同様東京湾東岸にみられる終末期方墳としては，養老川河口の北岸台地縁辺にみられる古墳群のなかに多く営まれている。数量的には，東間部多古墳群9基，持塚古墳群5基，根田古墳群3基，台遺跡6基，諏訪台古墳群10基以上の計33基以上が確認されており(註7)，当地区同様それらが限られた台地上に占地することが指摘されている。墳丘規模にしても一辺20mを超えるものはほとんどみられず，盛土自体もきわめて低くまた存在しないものも多くみられる。これらは当地区の方墳群と共通するものである。一方，当地区と対比して非常に注目される要素として埋葬施設があげられる。東間部多古墳群からは明瞭な施設が検出されなかったが，諏訪台古墳群および根田古墳群においては，削平あるいは未調査となるものが多いものの，埋葬施設がいくつか検出されている。それらはいずれもあらかじめ掘り込んだ墓壙内に木棺を埋置する直葬の手法を採るものである。さらに，構築位置は，旧表土を掘り込むものと盛土内に形成される違いはあるが，ほぼ墳丘中央部に相当する。この埋葬施設のあり方は，養老川北岸台地上における方墳群の特性として注目されるのである。当地区における方墳の一要素として呈示した単室の横穴式石室とは根本的に異なる。このような状況から，同じ東京湾東岸のほぼ同時期と考えられる方墳群においても，地域間ではかなりの差異が生じてくるようである。

他に7世紀代の方墳を多く含む古墳群として，印旛沼周辺に位置する公津原古墳群があげられる(註8)。この古墳群は瓢塚古墳群，天王・船塚古墳群の3群を総称したものであり，すべてに方墳は含まれるものの，特に瓢塚古墳群において濃密に造営される。この地域における終末期方墳は，まずその立地として，数基ごとに小台地上に独立して造営される傾向が強いこと，さらに台地の奥部に集中することが認められる。また，墳丘の規模として，1辺20mを超すものが数例認められるものの，20m以下の小形の方墳が主体を占め，墳丘高も1m前後を測るものが多い。これらの様相は，東南部地区および養老川河口の方墳群においても認められており，この点では3地区とも同様の規制的なものが存在していたことが示唆される。この事象が他地域の終末期方墳群のなかにも共通するものであるかどうかはさらに広く検討しなければならないが，終末期において突然再利用される方墳(註9)の性格を考えるならば，大方この推測はあてはまるものであろう。

それでは，埋葬施設に関してはどうであろうか。調査された例から拾ってみると，瓢塚古墳群では，単室の横穴式石室5基，複室の横穴式石室2基，箱式石棺1基，天王・船塚古墳群では，単室の横穴式石室4基，箱式石棺2基，八代台古墳群では箱式石棺が1基確認されている。墳丘内における位置は，横穴式石室・箱式石棺とも南側裾部にある。このように公津原方墳群における埋葬施設は，単室の横穴式石室を主体としており，構築位置をも含めて東南部地区と共通することが指摘されよう。また，天王・船塚27号墳（伝伊都許利命墳墓）にみられる横穴式石室と箱式石棺の組み合せが，ムコアラク遺跡8号墳において，全国最大の終末期方墳として知られる岩屋古墳や茨城県鹿島郡鹿島町に所在する方墳宮中野99－1号墳における東西に2基並列した横穴式石室が六通金山5号墳においても認められることは注目される。これに対して，養老川河口付近の方墳群は先述したように墳丘中央部に木棺直葬の埋葬施設をもつものであり，横穴式石室および箱式石棺がまったく検出されていない。

このような埋葬施設の差異がいかなる要因で生

じるものかが大きな問題となってくる。これには，時期的なものと地域的なものの２つの要因が考えられるが，３つの地域における方墳群がほぼ７世紀の後半代に含まれる可能性が強いことから，時期的な要因によって差異が生じることは考え難い。そうすれば，内部施設の差異は地域性に由来することが想定できそうである。この点に関して，非常に興味深い事象として，箱式石棺の分布があげられる。この埋葬施設が茨城県南部より千葉県北部にかけて主要な位置を占めていることは先学諸氏によって何度か論考されており(註10)，さらにその南限については，中村恵次氏により千葉市松ヶ丘町大森小学校校庭内古墳が考えられている（註11)。ただ，東南部地区の古墳調査が進展するにつれ，墳丘裾部に箱式石棺をもつ例が増えており，この地区を南限として把えることが妥当と思われる。すなわち，本地区の方墳群が立地する台地を形成する村田川を堺にして以南には箱式石棺を有す古墳が認められないという状況が指摘されるのである。この箱式石棺の分布の特殊性はそのまま，先述してきた３地区の方墳群における横穴式石室と木棺直葬の分布と一致する。つまり，方墳群における埋葬施設は，村田川以北で横穴式石室，以南で木棺直葬という手法を採用することが一般的事象として把えられそうである。

V

以上，東南部地区における方墳群が全体との関連のなかでどのように位置づけられるかを検討してみたが，今一度本地区の方墳群の属性を整理してみると，①規模としては一辺20ｍ以下で，墳丘の存在しない例が多く認められること，②埋葬施設は単室の横穴式石室を基本とし，すべて南辺からのびる掘り方内に構築される。③副葬品は後期古墳に通有のもので，その内容は貧弱である。④構築年代は，７世紀後葉を中心とする時期に含まれる。この４点が挙げられる。そして，これらから，下総国にみられる７世紀代の方墳群との関係がきわめて強いことが想定された。

７世紀後葉になって突然発生する東南部地区の方墳群は，前代の葬制から脱却し，きわめて特徴的・画一的な葬法を確立する。これが示唆する意味はかなり重要であり，墓制に関する一大変革，ひいては社会構造の大きな変動がうかがわれる。安藤鴻基氏が，岩屋古墳の被葬者を蘇我氏とし、その直接支配により墓制上の一大変動が生じた（註12）と述べている点非常に興味を引かれるのであるが，本地域にこれをあてはめることはあまりにも短絡であり，さらに詳細な検討を加えねばならない問題である。ただ前述したように，本地域と印旛沼周辺の方墳群との共通性からすればあながち否定されるものでもなかろう。

以上，東南部地区における方墳群の様相を概略的に述べてきたのであるが，最初に呈示したように，地区内全体の古墳群あるいは近隣の古墳群との詳細な比較検討により，さらに大きな様相を把握すべきであり，これにより方墳群が明確に浮かび上ってくるものと思われる。東南部における古墳造営の消滅との関連もあり，さらに追求してみたい資料である。

（６班・東関道事務所）

註

１）田坂浩他『千葉東南部ニュータウン８』昭54

２）関口達彦『千葉東南部ニュータウン11』昭56

３）白石浩『千葉市大膳野北遺跡―千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』昭57

４）昭和56年度に栗田・榊原弘二が調査を行った。

５）阪田正一他『千葉東南部ニュータウン７』昭53

６）杉山晋作「日吉倉遺跡における古墳の特性」『遺跡日吉倉』昭50

７）滝口宏他『上総国分寺台発掘調査概報』昭56

８）玉口時雄他『公津原』千葉県北総公社　昭50

９）註６に同じ

10）市毛勲「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第41号　昭38

茂木雅博「箱式石棺の編年に関する一試論―霞ヶ浦沿岸を中心として―」『上代文化』36　昭41

杉山晋作「所謂『変則的古墳』の分類について」『茨城考古学』２　昭44

上記が代表的であるが他にも多くの論述がなされている。

11）中村恵次『房総古墳論巧』昭53

12）安藤鴻基「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢―滝口宏先生古稀記念考古学論集―』昭55